

2003年以降のアラブ諸国の対イラク外交政策 事例研究：サウジアラビアとヨルダン

アラブ戦略研究所 研究員兼副所長

ラーイド・ファウズィ・イフムード

アラブ諸国の対イラク政策や中東地域を方向付けている地域環境と主な要因

中東地域では過去10年間に非常に大きな変化が起き、冷戦時代終結の後、短期間存在していた旧来の同盟関係や勢力の均衡が覆される一方で、別の方程式から中東諸国に利益をもたらされるようになった。アラブ内外の関係を形成するために相互作用している主な変化が4つある。

その1：地域情勢とそのアラブ政策に対する影響

まず注目されるのは、2001年以降のアラブ世界に対する米国の政策の変化、特に同地域における同盟国との関係の変化である。過去数年間、そして2008年に入ってジョージ・ブッシュ前大統領の任期終了が近づくと、イラク侵攻後の「大中東圏構想」の実現を目指す米国は、同地域の同盟国とその利益に背を向けた。また、意外なことに同盟国が抱く基本的な恐怖を無視した。それはイランの脅威、勢力拡大に対する恐怖であり、その継続を米国が許したのは明らかである。こうした厳しい姿勢は2010年に入ると結実し、米国と欧州はイランとの新たな関係を構築するようになった。欧米諸国は、アラブ世界がこの関係から利益を得られるものと考えている。同地域で形成されようとしているこの新しい方程式は、対立する外交プレーヤー間ではアラブの利益の喪失に関する新たな理解として見られていた。その結果、アラブ諸国はより積極的に、イラクにおいて従来とは異なる役割を果たすようになった。すなわち、一方ではイランという「ルート」を經由しない限り「新しいイラク」とのあらゆる関係を排除しようとするイランの影響力に対抗し、他方では米国に対して、アラブ諸国の恐怖と利益を尊重する同地域の新しい政策を採用するよう説得するという役割である。

その2：現在のアラブ情勢は米国の「大中東圏構想」の一部である

アラブ地域では、多くの根本的な変化がその国家構造の最も単純な規範、野心、希望に及ぼす影響を容易に目の当たりにできた。9月11日の同時多発テロ事件はアラブ地域システムの脆弱さを露呈させた。同地域はイラクに発しシリアとレバノンに達する変化に備えるようになったが、それで終わりにはならなかった。

米国の構想はイラクに限定したものではない。それは米国のタカ派または新保守主義

派が推進するプロジェクトに基づくもので、対イラク戦争に端を発する中東のロードマップの書き換えと呼ばれている。このプロジェクトの下でイラク戦争の立案者は、特に中東における先駆的な民主主義モデル（模倣可能で、近隣諸国やアラブ世界の他国の政治体制に根本的な変化をもたらす主な源泉となりうるモデル）、そして民主主義、自由経済及び開発に基づく国家を創造することを目指す再建プロセスを経た後で、イラクが同構想の達成のための踏み台になると考えている。

従って、アラブ世界ではいくつかの変化が現在目に見えるようになり、同地域における米国の対策（具体的にはヨルダンとサウジアラビアに対する）の余波が明らかになっている。この2つのアラブ国家は、イラク占領の当初から、近隣国に脅威をもたらさず、「テロリスト集団」の温床にならない、統一され、安定し、自由なイラクを実現するべく、米国に協力してきた。しかし、ヨルダンとサウジアラビアは、東部国境にシーア派の「民主主義国」を抱えることを快く思っていない。米国は全く理解を欠くこれらの国家体制に多くのメッセージを送り始めるようになったとき、このことを認識していなかった。米国は（サウジアラビアに対して）政治改革を実行するよう圧力をかけているし、ヨルダンに対する援助はこの点に関する動向に関連付けている。

それと同時に、ヨルダンとサウジアラビアは、イラクにおけるイランの影響力と、イラクの有力政党や政治団体に対するイランの支配力の増大を恐れている。両国は米国との関係を利用して、シーア派政府の脅威について米国を説得し、米国と協力してその阻止を図るだろう。

その3：イラクにおける外交プレーヤーの増加とそのアラブ安全保障に対する効果

考慮すべき第3のポイントは、イラクの占領及びその後の政治構造が、アラブ諸国同士の関係（例えばシリアとカタールの穏健派アラブ諸国との関係）に大きな影響をもたらしたことである。アラブ諸国が何の役割も果たさなかったために、占領はイラクにおける新しい外交プレーヤーの出現という結果をもたらした。

占領の1年目には、米国が主なプレーヤーだった。米国は損失を出すことなくイラクを占領し、支配した。しかし、2年目に米国はこの特権を失った。米政府が犯した過ちに乗じて新たな外交プレーヤーが登場したためである。イラン政府はイラク内の支持勢力や直接的な介入を通じて、イラクにおいて直接的または間接的に自国の利権を作り出すことに成功した。

3年目には、多くの当事者がイラクにおける米国の政治プロセスを支持した。イラクの政治プレーヤーは、政治プロセスの基盤となった原則、すなわち「宗派別の配分」に依存していた。彼らは宗派別にプロジェクトを確立した。政治や治安の状況について、またはイラクとアラブ諸国との関係について何らかの和解を得ようと交渉する際には、彼らを見捨てることはできない。

また、各派閥の武装集団、抵抗組織や民兵組織がより強力となって勢力を増した。彼らはあらゆる和解に不可欠な存在となり、米国はそれを認めて彼らと何度も交渉した。このような要因は、一部のアラブ諸国がこうした集団を自らの利益のために操作するこ

とに頼って新体制との関係を築くという、限られた手段を提供する。

4年目と5年目には、新たな当事者がイラクで影響力を持ち始めた。彼らはこの状況の中で一定の役割を果たして、イラクの将来に関心を持ついかなる当事者も、彼らに意見を求めその利益を考慮に入れなければならないような指針を設定しようとした。トルコ軍はイラク北部で作戦を実施し、その政策をあらゆるプレーヤーに押しつけた。占領6年目と7年目に入っても、アラブは有効なスタンスを取れないでいる。それはイラクの将来に対する明確なビジョンがなく、他のプレーヤーが新しいプレーヤーすなわちアラブ民族を排除しようと懸命に努力しているからである。

その4：アラブ世界とイラクにおけるイランの役割

イランはアラブ諸国と異なり、イラクに対しても、アラブ世界に対しても明確な戦略を持っていた。ひとつの戦略を複数のイラン高官が宣言し、イランはその実現に努めている。

そのため、イランは政策を実施するために必要な措置を取り、アラブが同意するかどうか、または同盟国の支持を得られるか不満を呼ぶかにかかわらず、同地域内で同盟国を持った。しかし、重要なのはイランの戦略を実施することである。従って、戦略的見地からは、イランの同地域における利益はイランによって法的に正当化され、イランはこの枠組みの中で自らの利益を保証するように対イラク政策を策定した。

1. イランの対イラク戦略は、イラク人としてのアイデンティティやアラブ民族主義を犠牲にしたとしても、イランを完全に支持するイラク政府を樹立し、もしこれが実現できない場合は、少なくともイランに敵対しないイラク政府を設立するという短期的戦略に基づいている。
2. アラブ地域におけるイランの戦略は、自らの局地的な事情にかない、その存在と影響力を内外で保証するような方法で、自らの利益を強化することを目的としている。イランはこの枠組みに従い、アラブ地域ではまず脅威となる全ての事件に対応し、米政府を混乱させてイラン政府への圧力を戦略的な政策や教訓によって弱められるように策定した。従って、イランはハマスが主導するパレスチナ政府を支援し、2006年6月にはイスラエルのレバノン侵攻に対抗してヒズボラを支持した。イランはこれによってシリアとの同盟関係を固めたが、より重要なことに、イランが同地域の政策上のプレーヤーになることを防ごうとするイスラエルと米国双方の政策に地域の人々が対応するための主な選択として、武装抵抗という選択肢を支援した。この最後の目標は、サウジアラビア、エジプト、ヨルダンからなる「穏健派アラブ諸国」のイランに対する思惑の一部でもあった。

イランの対イラク政策の本質は、協力的な政府、または少なくとも非敵対的な政府を樹立することに基づいている。この枠組みにおいて、イランはイラクのあらゆる当事者を利用してこの戦略を実施しようとしている。従って、イランはシーア派勢力⁽¹⁾に対して

は、特に以下の2つの視点から対応している。

1. 国内を掌握し指導できるとイランが考える勢力や当事者を支援すること。これらの勢力は、イラク政府がイランに協力し、敵対しないように働きかける。この任務は特に、イランが認定した支持勢力、例えば最高評議会とダアワ党に与えられた。この2つの当事者は、イランが長期にわたって関係を持ち支持してきたことに加え、イラクにおける自国の利益を実現してくれるとして現在も信頼している唯一の当事者だからである。
2. この—上記の—戦略を達成するには、イランはイラクの状況を現状のまま（すなわち不安定なまま）維持することが必要だと認識している。なぜなら、安定化または現状の改善に向けたいかなる変化も、イラクにおけるイランの利益に影響し、それを脅かし、また米国の政策を東方にシフトさせる²⁾ことになるからである。従って、イランは米政府の方向転換を防ぐには現状維持が最良の政策であると気づいた。つまり、米国を長期にわたってイラクに没頭させ続けることこそ、イランが巧妙に実行すべき課題である。

これを実現するため、イランはイラクにおける自国のイメージがどうなるうとも、イラクで不安定な状況を維持できるもうひとつ別のイラク内勢力を必要とした。そこで選択されたのは（ムクタダ）サドル派やその分派のひとつであった。様々な理由により、イラクにおいてイランの政策を実行させ「汚れ仕事」をやってもらうためにサドル派が選ばれた³⁾。

結果的に、イランはその地域内のカードをシャッフルし、米国に政策を変えさせイランとの交渉を強いることに成功した。それは米国にとって戦略的パートナーであるアラブ世界を犠牲にする政策であったにもかかわらずである。そして、イランにとって極めて重要な問題である核開発計画について、イラン政府は同地域、特にイラクにおいて米国に対する圧力を緩和することと引き換えに、世界及び欧州からの圧力を緩和しようとしている。

従って、イラクはイランにとって、国内外の問題に対応するために不可欠かつ重要な舞台となった。つまり、国内的には反体制派による内部の危機から人々の注意を逸らし、国外的には、イラクの安定化の追求及びイランが初めて積極的に関与するようになった中東におけるその他の問題を利用して国際的圧力を緩和するという方策である。

こうした状況に照らして、一般的にはアラブ諸国の一部とイラクの関係、そして特にヨルダン及びサウジアラビアの対イラク関係が設定された。事実、アラブ諸国の対イラク政策は上記の要因に基づいている。

その1：2003年以降のヨルダンの対イラク政策

ヨルダンとイラクの関係においては、過去20年間にわたって、両国の共通利益がその基礎になっていた。イラクはヨルダンの政策と経済の強力な支持者であった。また、イ

ラクがリスクに苦しむことは、ヨルダンにとっても戦略的に深刻な問題である。同時に、イラク政府が過去20年間バグダットの港の利用を禁止されていた間、ヨルダンはイラクにとって世界への窓口だった。このことが、両国間の強力な関係の背景にあった。アンマンは、経済面でバグダッドにとって主要なハブになった。ヨルダンは以前、イラクから大量の石油を無償で受け取っていたが、これは米国のイラク侵攻によりイラクの「スンニ派」政府の支配が終わった時に停止された。この侵攻により、ヨルダンはイラクと良好な関係を維持していたことに対する高い政治的代償を払わされた。

共通の利益に基づき、ヨルダン・イラク関係は長年にわたって強力であった。しかし、イラクの方程式が崩れ、外国のプレーヤーがイラクとアラブ世界、特にヨルダンとの関係への影響を顧みることなく新しいイラクの建設に介入してきたために、状況は一変した。

宗教的な（シーア派の）アプローチを取る現在のイラクの当事者は、アラブ諸国やヨルダンと元バース党勢力との関係が今、イラクにおいて重要な役割を果たし、イラクの対アラブ諸国政策の策定に関与していることに憤慨している。また、歴史的にイラクと中東地域に対して貪欲な野心を抱いていたイランの役割が大きく拡大している⁽⁴⁾。従って、イラクで何らかの役割を得ようとする全てのアラブ当事者（ヨルダンを含む）は、あらゆる対イラク関係において、この点を基本政策とすべきである。新たなイラク指導者層のアプローチは、ヨルダンとその指導者層に恐怖心を引き起こした。米政府が同地域の同盟国やパートナーの懸念を無視し、スンニ派アラブ人が大規模なボイコット運動を起こしていた2005年1月の選挙を6ヵ月延期すべきとの忠告や、多数のイラク政党が幅広くボイコットしていた憲法の批准を急がないようにといった忠告に耳を傾けることを拒否した際に、この恐怖心は増大した。ヨルダン国王はこれを受けて、イランが主導するシーア派の三角地帯が同地域に確立されるという恐れと、それに対する警告を表明するに至った。その結果、イラン政府はイラク内の同盟勢力と協力して、同国のアラブ人に対する敵対運動を開始した。この運動は、シーア派イラク人を扇動してアラブ諸国に敵対させることを基本とし、アラブ諸国はイラクを運営する権利を彼らから剥奪することを望むスンニ派国家であると説得しようとするものであった。

米国はヨルダンの恐怖と忠告を無視した。シーア派がイラクで権力を掌握し、イランの同国における影響力が増し、イランとアラブ諸国の関係は急速に悪化した。

2009年初頭までは、安全保障がヨルダンとイラクの関係を支配していた。しかし、ヨルダン政府の政策は徐々に変化して、イラクでより積極的な役割を果たすようになり、自国の経済的利益や政治的利益を関係の基礎に据えるようになった。事実、ヨルダン政府は、アルカイダのような組織が活動の中心とみなしたイラクの不安定化を恐れた。ヨルダンは、イラク問題についてより大きな役割を果たすには、同国の経済制度の「能力不足」というジレンマを乗り越えなければならなかった。その目的を達成するために、同国は国家としての存在や政治的、経済的利益の確保に影響する課題を再検討しなければならなかった。

ヨルダンが同地域のカードをシャッフルする戦略を採用したのは、それが理由である。下記を含むいくつかの仕組みを構築した。

1. 結果的に容認できない圧力がもたらされ、イスラム主義反政府派等の国内勢力やパレスチナ系ヨルダン人等のヨルダン人グループの間で保たれている現在の方程式が崩れかねないとしてもなお、イラクにおける米国の政策を引き続き支援すること。両者とも、ヨルダンの脆弱な経済と能力不足をパレスチナ国家の樹立によって補うか、少なくとも西岸地区の安全を保障する役割⁵⁾を受け入れようとする米国の意図を恐れている。
2. 国家案に基づいて占領地域に自立可能なパレスチナ国家を樹立する可能性が弱まり、当事者間の平和を達成する見込みがなくなった後は、このシナリオが、パレスチナ・イスラエル紛争を集結させるための唯一の論理的な選択肢だからである。この交渉は今も 米国の政策立案者の頭の中で大きな位置を占めている。
2. 穏健派アラブ諸国（エジプト、サウジアラビア、UAE）と協調して、これらの国々とイラクの間の調整役になると共に、その結果を集团的に受け止めること⁶⁾。これらの国々は、ヨルダンがイラクで単独のプレーヤーになる能力がなく、また、他のアラブ地域のパートナー諸国⁷⁾または米国の支援がなければイラクからもたらされる影響を阻止することもできないと認識している。米国の支援を求めるという選択肢を取れば、これらの諸国はイラクの安全保障のために目に見える役割を担い、段階的に撤退する米軍を代替することを求められるかもしれない。これはアラブ諸国にとっては非常に高くつく選択肢である。その結果、ヨルダンはイラクとの交渉及びイラクに関する米国との交渉において、穏健派アラブ諸国の意見を表明する代表に選ばれた。
3. イラクの安全保障に関する役割の拡大。多数のヨルダン政府高官は、自国の安全保障はバグダッドから始めると述べ、ヨルダンの諜報機関がイラク国内で活動していると明言している。
4. 「石油に関する覚書」の実施や陸路（アンマン～バグダッド間）の確保を含む経済的利益が、ヨルダンの中核的な関心事となった。ヨルダンがイラク警察の訓練と覚醒評議会⁸⁾の支援に関心を持ったのはこのためである。ヨルダンはその後2つの目標の達成に成功した。まず、両国をつなぐ陸路を確保し、アンマンへの石油輸送の維持に貢献した。第2に、ヨルダンはアルカイダ組織による国境への脅威を退けることに成功した。
5. イラクの異なる諸勢力、特にヨルダンの恐怖を共有するスンニ派勢力との関係を強化すること。ヨルダンは非常に強固な関係を構築し、どの当事者も大きな損失を出さずには撤退できない状況になっている。ヨルダン政府は権力を掌握したシーア派勢力とも同様の関係を構築しようとしている⁹⁾。
6. 過去の関係とイランの介入により、シーア派が支配するイラク政府とヨルダンとの関係は限定的である。しかし、イラク側のヨルダンに対する消極的なスタンスにもかかわらず、ヨルダンはこの関係の構築を主張している。ヨルダンは多数のイラク人を受け入れて温かく歓迎し、彼らが国内で事業を始めたり自らが属する組織を代表したりすることを認めた。しかし、ヨルダン側によるこうした政策は、イラクのシーア派側から同様の対応を引き出すには至っていない。イランは依然としてイラ

ク国内のパートナーを厳しく支配しているが、ヨルダンとしては接触を維持する以外の選択肢はない。

その2：2003年以降のサウジアラビアの対イラク政策

過去10年間のイラク・サウジ関係は、国家間関係の土台になるはずのない、互いに対する恐怖感に加え、両国間の信頼の欠如に基づいていた。その関係が地理的な基盤に支配される隣国間においては言うまでもないが、国家間は（その本質にかかわらず）相互の信頼と共通の利益に基づく関係であるべきだ。それにもかかわらず、これらの要因がなお両国関係の基礎になっている。

サウジアラビアとイラクが共有する恐怖は、以下の2つのレベルに分けられる。

- 内的な恐怖（イラクまたはサウジアラビアにおけるシーア派の役割の拡大）
- 外的な恐怖（同地域でイランが主導的な役割を果たすようになって勢力の均衡が崩れ、特にサウジアラビアが犠牲になる）

イラン革命の前後と主に2003年のイラク戦争後の両国間関係を調べると、シーア派の勢力拡大に対する恐怖と、地域レベルの役割をスンニ派地域において果たしたいという願望が、一方の側面から、また両国間関係とその動向の根拠として、その関係に影響を与える懸念となっていた。

このアプローチは、国内のシーア派少数集団に対するサウジ政府のこれまでの政策に明らかに見てとることができた。同国の東隣にシーア派国家が設立された後、状況は悪化した。

シーア派の勢力拡大についてサウジアラビアが最も恐れているのは、宗派に対する忠誠心が国家に対する忠誠心を上回ることである。サウジアラビアのシーア派はサウジ当局ではなく、国外の聖職者を支持し、彼らに従う。このことから、国内外で以下の2つの結果がもたらされている⁸⁰。

1. 国内では、シーア派は国内の重要な役職から排除されている。彼らが5番目の柱になり、社会構造を脅かす可能性があると考えられているためだ。
2. 対外的には、サウジアラビアのシーア派は国内で排斥されているため、イラクにおけるシーア派の運動を支持した。彼らはこれによってサウジ当局を動かす、シーア派が公職についたり政治に参加したりすることを認めさせたいと考えている。

これはイラク・サウジ関係が危うい基盤の上に成り立っており、異なる影響を及ぼすことを証明している。サウジアラビアは、国内のサラフィ主義運動の支持を通じてアフガニスタンでソビエトと戦った過去の戦術を復活させようとした。その目標は、イラク内外でシーア派が徐々に台頭してくるのを防ぐことである。サウジ当局は対イラク関係において、この運動の追隨者に代理戦争を戦わせることを通じて、イランの影響力を押

し止めようとした。この戦術によって、アルカイダの台頭を通じて存在が明らかになった国内の反対勢力を排除し、弱体化させることも可能になるだろう。

しかし、この戦術は、宗派心が強いとの非難を理由にイラク首相との会談を拒んだことで浮き彫りになったサウジ政府のイラク政府に対する疑念と共に、同様の姿勢で応酬しかねないイラクとサウジの関係を脅かす可能性がある。イラク諸勢力の一部は、紛争をイラクから、自国民または犯罪行為への関与を通じてイラクに介入している隣国に移動させたいと考えている。何人かのイラク高官及びその他の関係者は、イラクにおける戦闘や爆破テロをサウジアラビア国内に移動させてみせると威嚇している。

こうした影響から、サウジの役割はイラクにおける安全保障のみに向けられている。しかし、サウジアラビアはイラクにおいてこの役割を単独で果たすことはできないことを十分に承知している。従って、同国はその努力を他のアラブ諸国と調整し始めた。特に米軍がイラクに自らの運命を決定させる（最終的にイラクをイランに引き渡すことを意味する）可能性が高まっている現在、イラクにおけるさらなる反動を受け止めるためである。

リアル・クリア・ポリティクス（米国の政治サイト）に掲載された記事によると、米国のファインスタイン上院議員とクリストファー・ドッド上院議員は、「我々はイラクに3年以上駐留してきたが、段階的な配置転換を始める時期に来ていると考える。我々の、そしてアメリカ国民の関心は、兵士たちを母国に帰還させるか、国家の安全を守るためにより必要とされている他の地域に配置転換することにある。この戦略は国民の大多数に支持されており、彼らがイラクにおける我々の役割の変化を望んでいることは明らかだ。過去3年間、米国はイラク戦争において誤った方向に誘導されていたかもしれないが、今や世界の情勢は異なっており、米国はイラク国内の事実判断を誤ってはならない。我々はミッションを変える必要がある」と述べた。

可能性は低いがソマリアで実績があるように、米国がイラクから撤退すると突然決定するようなことがあれば、アラブ諸国、特にイラクと国境を接する国々は危険にさらされる。従って、これらの諸国はイランに対抗して何らかの措置を取るか、コンドリーザ・ライス前国務長官の上級顧問を務め米国のイラク政策を調整したデイビッド・サッターフィールドが述べたとおりに行動することが肝要である。同氏はこう述べた。「あらゆる当事者はイラク問題に対するイランの介入を懸念している。イラクの近隣諸国はこの事実を認識し、慎重かつ孤立した政策ではなく、必要な立場を取るべきだ。これらの諸国はイラクにおいて、特にスンニ派三角地帯の安全を確保する上で果たすべき役割があり、それはサウジアラビアに対する明確なシグナルになる」¹⁾。これは、サウジアラビアの安全保障顧問だったノワフ・オベイドがその記事で言及したのと同じ危険である（サウジのイラクへの介入は、地域戦争の火種になりかねないという大きな危険を伴う。しかし、介入しなければ結果ははるかに悪くなるかもしれない……）。サッターフィールドはさらに、米国がイラクからの撤退を始めれば、その結果のひとつとして、イランの支持を受けたシーア派民兵組織によるスンニ派イラク人の虐殺を防ぐため、サウジアラビアが大規模な介入を行うだろうと述べている²⁾。オベイド安全保障顧問によれば、スンニ

派イラク人の殺害を見過ごすことは、サウジ王国建国の礎となった原則を放棄することを意味し、スンニ世界におけるサウジアラビアの信用は失墜し、何よりも同地域におけるイランの軍事活動に屈することになる。

この文脈において、リヤドに駐在するある西側の外交官は、サウジアラビアが実際にイラクのスンニ派部族に資金を提供していると主張した。彼はロイター通信に対し、「彼ら(サウジ政府)が(スンニ派)部族に資金を注入していることに疑いの余地はない……それがサウジのやり方だが、もし彼らが軍隊を派遣すれば大殺戮が起こるだろう」と述べた¹³⁾。

このように、サウジアラビアはイラク情勢における潜在的な危険に対応するため、その努力を他のアラブ諸国と調整し始めた。そして、イラク及び地域との関係において政治的及び安全保障上の恐怖と脅威を共有するヨルダン¹⁴⁾に、必要なものを見出した。

従って、サウジアラビアとヨルダンは、特にイラク情勢への対応、そして一般的にはアラブ世界の情勢に対応すべく、力を合わせ調整することになった。今のところ、この努力は情報資料の交換とイラク国内での限定的な活動に限られている。両国がこのように立場の一致を見た背景には、いくつかの理由がある。ひとつは、シーア派の著しい勢力拡大に対する恐怖である。ひとつは、レバノンで明らかになった、中東地域におけるイランの影響力の増大である。そして、ヨルダンには必要な政治力と資金力が欠けているため、この新たな現実がヨルダンをサウジアラビアとの協力に向かわせた。

結 論

言うまでもなく、安全保障はアラブ諸国間及びアラブ諸国とイラクの関係において主な要因であり続ける。これらの関係の発展を阻害している原因は手つかずのまま残っている。アラブ諸国一般、そして特にサウジアラビアとヨルダンは、未だにイラクにおける自らの役割を見いだせないでいる。次の段階においても、これら諸国の対イラク政策に変化が見られるとは思われない。例外として、個別の民間資本もしくは当事者間の戦術的な関係に限られた役割を果たす可能性はあるが、イラク国内で政治的かつ戦略的な役割を果たすことはないだろう。アラブ諸国は予定されている議会選挙(2010年3月)の結果を待っているが、その結果は前回と変わらず¹⁵⁾、イラク人の宗派別アイデンティティと同国の宗教的イメージが継続するものと思われる。これにより、世俗的なアラブ諸国一般、そして特にスンニ派の諸国は、宗派別のアイデンティティによって支配される国家との交際に警戒を強えられることになるだろう。従って、アラブ諸国はイラクに対し、1979年の革命以降イランに対して取ったのと同様の立場を取ると予想される。これは西側諸国と東側諸国の間に見られた状況に似た、冷たい関係である。その結果、イラクとイランとアラブ諸国、そしてこの地域の人々は天然資源と国益を巡る紛争に巻き込まれるだろうが、今回の紛争は宗教的なアイデンティティを巡るものとなるだろう。

また、イランが7年を経てイラクにおける有力なプレーヤーとして台頭してきたのに対し、アラブ諸国の役割は弱く、あるいは欠落したままである。同時に、イラクの治安状況がまだ脆弱であり容易に悪化しかねないなかで、米国はイラクからの撤退を準備し

ている。このように不安定な環境から判断すると、イラクと中東地域では宗派間の緊張が続くだろう。その結果、ヨルダンとサウジアラビアを含むアラブ諸国は、イラクと中東地域で形成され始めた新たな方程式を恐れている。イラクの治安状況に現在見られる改善を維持するために、米国はこの方程式を採用する可能性がある。すなわち、米国とイランが何らかの合意に達し、一方ではイラクが、他方ではアラブ諸国がその合意から除外される可能性である。

この方程式がまだ採用されていない理由は、米国の旧来の対イラン政策に対するコミットメント、すなわちイランにおける変化が内部から生じる可能性があるという考えに求めることができる。イランに対する欧州の交渉手法は弱く、不十分であることが判明している。イスラエルは、イランの核開発計画との共存を強いられるという帰結に耐えられないため、イランの核施設の攻撃を望んでいる。

イラクの政治に対するイランの支配的立場と、米国のイラク撤退の必要性が有利に働き、イランは次第に力を増して地域的な役割を果たすようになり、10年前には関与していなかった中東の争点に関して有力なプレーヤーになりつつある。このイランの役割の拡大は、サウジアラビアとヨルダンの懸念を呼ぶのに十分であった。その結果、両国は慎重姿勢とイラクにおける孤立した役割から決別する新たな政策を採用し始めた。

(注)

- (1) 米国のイラク占領前の段階では、イランのイラク人（スンニ派とシーア派）との関係は様々な目的に支配されていたが、そのうち最も重要な目的は、多数の支持者を引きつけてパース党の影響力から引き出すことであった。イランはこの枠内において、パートナーが何を望んでいるのか、イスラム共和国の安全保障を強化する用意があるのは誰かを確認し、さらにイランを支持しイラクにおけるその利益を維持する治安部隊を形成するべく努力する。我々は「対内的野心と対外的忠誠心の狭間にあるサドル派運動」と題する研究を準備している。この研究は、この運動に関する別の研究（サドル派運動、設立、プライバシー、役割と未来）に含まれる。
- (2) 2003年以降のイラク問題は、中東に始まり遠くアジアに達する米国の世界戦略の一部にすぎない。従って、その究極目的を達成するためには、中東の安全と安定を確保しなければならない。イラク問題はこの戦略を脅かすものであり、米国は前に進むためには、どんな犠牲を払ってもイラクを安定させなければならなかった。オバマ政権は、対テロ戦争はアフガニスタンにしか存在しないと考えているため、この政策の再開に向けて動いている。その結果、旧戦略が再開されれば、イランの利益は重大なリスクにさらされる。米国がこの戦略を実施するために全力を挙げてイランに圧力をかけるからである。
- (3) ムクタダ・サドルは依存型で、完全にイランに従う抱擁政策を拒否していたが、イランはムクタダにこの役割を与えることを通じて全てを解決した。その理由は2つある。第1の理由は、イランがイラクにおける主要な協力者（最高評議会、ダアワ党）を失うことを恐れていること、第2の理由は、単純な組織構造と運動の指導者の均衡

を欠いた政治的役割,つまりイランがその気になればこの運動を切り捨てられることである。

- (4) イランは時折,イラクにおける自国の歴史的権利を再確認する声明を発表する。
- (5) ヨルダンは2003年以前には,必要な石油を特別価格でイラクから入手していたが,この特権は,米国がヨルダンの政策と役割に反対する新政府をイラクに樹立した際に停止された。ヨルダンはイラクの前政権の排除に参加したが,米国はこれに報いなかった。
- (6) 一般的に,アラブ諸国はイラク問題に関与することを恐れている。その影響によって自らの安全や政治的安定が脅かされるからである。サウジアラビアは,シーア派の勢力が拡大して自国の社会・政治構造が浸食されることを恐れている。また,イラク部族がサウジ部族の中に広範囲に広がれば,将来の体制に対する脅威になりうる。イラクの不安定な状況が湾岸アラブ諸国にもたらす影響についても,同様の恐怖心が見られる。
- (7) これらの諸国は不安定な環境に対応できない。内部構造が弱いために,地域が直面している大きな変化をまだ受け入れられず,主にイスラエルや和平調停の達成といった重要かつ決定的な問題に対応できないでいる。アラブ諸国の役割はアラブ連盟の役割を通じて浮上してきた。2005年3月に開催されたアラブ・サミットは,イラク情勢に集団的に対応するためにアラブ閣僚委員会の設置を決定した。この委員会は何度も会合を開き,イラク問題に対するアラブ諸国の公式なスタンスを表明している。
- (8) その野心と現在の役割にかかわらず,ヨルダンは2006年に,覚醒評議会と呼ばれるスンニ派集団を訓練する上で大きな役割を果たした。ヨルダンの目標は,バグダッドから当時アルカイダの強い影響下にあったアンバール県を通してアンマンに至る石油の流れを維持するために陸路を確保することと,アルカイダによるテロの再発を防ぐことであった。アルカイダはヨルダン王国内部で同国の安全を脅かすことに成功していた(アンマンとアカバの主要ホテルを標的にした2005年のテロ攻撃)。
- (9) イラクのシーア派勢力は,ヨルダンがその統制手段を通じて,または,部族的なつながりと経済的利益によるいくつかの有力なスンニ派勢力との特別な関係を通じて,イラクにおける役割を拡大していることに目を向けている。ヨルダンの最大部族であるシャムル部族は,イラク側部族と緊密なつながりを有している。この関係に基づいて,国王アブドラ2世は,この有力部族の指導者であるガーズィー・ヤーワルをイラク暫定政府の大統領に推薦した。米国はこの推薦を受け入れ,サダム・フセイン後の最初のイラク大統領に指名した。ヨルダンがイラクのスンニ派に対して大きな影響力を有しているため,イラク人はヨルダンとの関係の重要性を確信している。イラク高官の多くは,ヨルダンがイラクのスンニ派部族に対して影響力を有していると考えている。イラクのスンニ派部族は以前,ヨルダンの安全を維持し,アラブ戦闘員の侵入を防ぎ,アルカイダ集団を包囲し,スンニ・ムスリム宗教学者協会などのイラク反政府集団の動きを規制していた。
- (10) サウジアラビアや湾岸アラブ諸国に住むシーア派は,クム(イラン),ナジャフ(イラク)及びベイルート(レバノン)のシーア派聖職者に対する忠誠心が強い。彼らは

これらの聖職者から宗教的教えと指導を受ける。湾岸諸国には卓越したシーア派聖職者がいないためである。

- (11) イラクの著者サミール・エベイドが2006年6月30日に発表した、イラク南部に劇的な変化が起こることを示す兆候に関する研究。
- (12) Nowaf Obeid, *Stepping Into Iraq Saudi Arabia Will Protect Sunnis if the U.S. Leaves*, Wednesday, November 29, 2006, *Washington Post* を参照のこと。
- (13) Islamonline が Al Mukhtasar のウェブサイトに掲示した2006年11月30日付けの報道記事「サウジがスンニ派を救うためイラクへの介入を示唆」。サウジアラビアは過去に、イラクにアラブ部隊及びイスラム部隊を派遣する案を支持していた。2004年8月、サウジのサウド・ファイサル外相は、イスラム部隊をイラクに派遣するアイデアを当時の米国国務長官だったコリン・パウエルと協議し、2004年7月28日には、当時サウジアラビアを訪問中だったイラクのアラウィ首相と協議した。サウド・ファイサル外相とアラウィ首相は、イラクの近隣国にこの部隊に参加するよう要請すると発表した。アラウィ首相はこの提案を支持すると述べ、アラブ諸国とイスラム諸国に対して、一致団結してイラクを支持して欲しいと呼びかけた。2008年8月1日に会談が終了すると、サウド・ファイサル外相はイスラム部隊をイラクに派遣して米国が主導する多国籍軍を代替することが可能だと発表した。「イスラム部隊を派遣するには、何らかの条件を設定することが必要」であり、特に「この部隊は現地の多国籍軍を代替するものであり、それに加わるものではない」とサウド・ファイサル外相は述べた。同外相は、この部隊はイラク当局から明確な要請がない限り派遣しないこと、そして同部隊は国連の指揮下で活動することを強調した。「要請は、イラクの全てのグループから明確かつ完全な支持を得た上でイラク政府からなされるべきであり、部隊は国連の傘下で活動すべきである」と同外相は述べ、「政権を選択する選挙の組織を含め、イラクの政治プロセスについては国連が責任を負うべきだ」と付け加えた。

Metlaq Saud al Meteiri : *Arab troops in Iraq , " requirements conditions for deployment "* Al Sharq Al Awsat daily , December 20th , 2006を参照のこと。

- (14) ヨルダンの恐怖を強調することが我々の目的ではない。我々はただ、ヨルダンとサウジアラビアが、特にシーア派とイランがアラブの問題への関与を強めていることに関連して、同じ危険を共有していると述べたいだけである。

2006年11月27日、アブドラ2世国王はこうした危険についてコメントし、国際社会が直ちに有効な措置を講じなければ、中東地域では3つの戦争が勃発し、イラクとパレスチナとレバノンが戦火に包まれる可能性があるとの危惧を表明した。

- (15) この見通しについては、イラク戦略研究センターがアンマンで2010年1月30日に開催した「2010年議会選挙後のイラクの未来」と題する会議の参加者も認めている。著者が参加したこの会議には、イラクの学者や政治家、イラク国民議会の議員も参加していた。

(この報告は、競輪の補助金を受けて作成されたものです)